

(1) Sherpi Kangri を登るには.

8月11日 我々の弱小Partyは Sherpi を断念した。  
 食料は 8月25日まであと2週間分があった。撤収に1週間  
 を予定していたから 1週間の日数があった事に由る。  
 東峰南稜は標高差1600m 氷岩峰 氷2岩峰 あり。  
 南稜台地。かう。急な尾根が頂上へ 続いている。  
 C3 から台地まで 500m の高差があり 左側。マ36氷河側  
 は約1000m 左側のカルは500m くらい 切り落ちていて。  
 Base Camp からのルートをふり返ってみると。仮B.C. から B.C.  
 まで。3700m から 4500m のエールを越えて 入らぬ はずはない。

- 仮B.C. 3700m Sherpi 左岸の E-線
- B.C. 4300m エール上のエール
- C1. 4850m 氷1 ice fall 氷2 ice fall の間
- C2. 5250m 氷3 ice fall 落口の E-線 上
- C3. 5750m 氷4 ice fall 直下の Gl. 上
- C4. (6250m) Sherpi La の snow fold.
- C5. (6700m) 南稜台地
- 頂上 (7303m) 南稜氷壁上の IT attack

にて東峰は登れると思う。今回の Expedition の場合、  
 実稼働日数28日で計画しており。約4週間である。  
 これでは。C4 建設までがせいぜいであり。又、これ  
 以上の日数がおくれれば。一旦 B.C. へ下山。休養後  
 再攻撃するだけのじゅうりしたかま元がなければなら  
 ない。この体力的限界と食料の均一化による不

端、メンバーの實力等を加味しなければならぬ。  
 C3からC4の荷上げを、隊員だけでやるか、それと  
 high Porterを使うかは、実に大きな問題であるが、  
 隊員構成の上でも実に大きなPointとなる。そのあたりが  
 Porter less登山を続けてきた神大印の弱点で  
 もあり、又、今回の遠征でも、high-porterの使  
 いのまずさが目立った。

低所キャンプでの隊員がやるべきトランスポート等、  
 今回の場合、不慣れた隊員をB、C1に回し、快晴  
 の中に、上部キャンプで動きが取れぬ事となる等、  
 多く目立った。特にハイポーターの食料の管理、B、Cでの  
 cookのかんぱく等、長期間、きめ細かく、午配できる人物  
 を配さねばならぬ。

次に、隊員の能力、気負の問題であるが、ただ、  
 という、実に困った隊員が中にいた事は、メンバー決定時  
 に、せつかく行きたがっているのだから、いた温情を加えた  
 事がまちがっていた。さらにhealth checkの結果、不安  
 のあた、隊員2名が、その通り高所で使えぬもの  
 ならなかった点、実に失敗であった。

若年3名についても、ぬばりのなさ、苦しみに耐えよう  
 する態度のなさは、あきれるばかりであった。そのあた  
 りをうまくリードし、導いてゆくには、副隊長は若すぎ、や  
 たら反発を買うばかりで、いくらしかりつけ、厳しくしても  
 意味がないという結果に終わった。

例えば、装備の管理、各ポイントの必要物資の荷上げ

炊事のふいはい等、いわく、"守備範囲が広すぎる"とは遠征  
 隊員の姿勢としてさびいではないか。

Doctorについては、小性としては、あつかいかねるので、隊長にたの  
 む事としていたが、もう少し、しめて、要求すべき事、Doctorの希  
 望等、良く話し合っ、全体をleadしてもらいたかった。

隊長が自ら上部キャンプへ進む事については、何ら  
 問題は無いと思うが、(6000mまでは)よほどうまく指揮し  
 なければ、下部の補給、ハイポーターの指揮、liaison Officer  
 との交渉等、さらに下部キャンプの隊員の行動まで見とけね  
 ばならぬ。C2で1回high-porterの食料が切れ、高所レシ  
 ョンの一部を彼等に与えなければならぬはめめにもなった。  
 C3では、ル+工作資材がなく、一日、おぼろ事もあった。

何にもまして、残念な事は、Sherpaを断念して帰途  
 についた後の若年隊員の態度である。気分を引きしめ、采  
 耳のため、あるいは、再度自分がSherpaに挑戦し、もの  
 にしたい、という意思のなさ、次のために、いろいろ積極  
 的に、行動しようという気持ちのなさである。

私設ポーターを雇って、空身でキャラバンを行くなど、  
 あきれて注意する気もなくなった。又、その行為に対し、  
 自分の金で支払え、という、バラサーブの意見もまちがいだ  
 と思う。相半は逆に自分の金で支払うのだから、ポーターをや  
 る方が、かたてではないかという事になる。自分で運ぶもの  
 を止め、体調に合せ重さを決めるのは良いが、少くとも  
 必要なものは背につけて歩いてもらいたかった。それ  
 が山男の山に対する、気持ちの現れともなる。

装備係もルーズさは目立ち、ビンディングを買ったクロシン  
ランプのホヤをわり、スノーブはすぐに使いものになら  
なくなり、ラテの電球の替えはなく、兵装のきちとした  
管理はせず、トランシーバー等ぬれてもOK、テールランプ  
は、ほこりまみれでもOK. といった調子。

食料係はますます頑張っていたが、能力不足の  
点 ばかりだ。日常からの研究心のなさが頼りだ。

こうして書いてゆくと、ほんまに遠征隊の運営の困難  
さがわかってくる。Sheyri を登るには、まだまだいろ  
ろ不足している。研究とトレーニング、トップクライマーの  
養成、これを済ませてこそ、頂上をものにできると  
思う。

若年隊員が、ホコ先生いわく、"満ちた羊よりもうた狼"  
になって、帰国してくる事を願いつつ、けつをたたいてきたが  
さて、どんなものが、副隊長の仕事は、それぐらいだろ。

おは、観光旅行団の添乗員の様ももの無給で  
せいぜい御利用下さいませ。

August 30, 1974.  
at Skardu,



テント

## (2) 氷河技術考

仮B.C からさそく ice fall にぶち当たり苦勞させられたが  
カラコルムの氷河の中でもきつて困難かつ、氷河のもつほとん  
どの要素を含んだ Sheyri Gang Gl. をルートに取った事  
は、隊員一同にとって、奥に良い経験となったものと確信  
する。経験した技術内容を分析すると。

1. サイド、モレンから bear ice へ出るルートの見出し方。
2. ネギダを利用した、氷河の横断。
3. bear ice 上の isen 無の歩行とカッティング
4. bear ice の ice fall の危険性。
5. bear ice (water ice) の、モレン付の危険性。
6. 4.5. 上のルート、ファイディング。
7. bear ice の ice fall の通過、isen technique
8. continuous climbing
9. モレンの続き具合。
10. ice fall 落口の氷の状態。
11. 雪線付近の hidden クレバスの状態。
12. クレバスの通過、サイドの snow slope の利用方法。
13. 雪線以上の ice fall のルート、ファイディング
14. ice fall のルート、エト。
15. flag の張り方、ルート指示方法。
16. ice ルーケンの使い方。
17. fixed rope の set 方法
18. はしごの効果
19. セラックスの崩壊
20. 新雪後のルートの再確保。

算、いろいろと多く学んだはずである。

第4 icefallでは、特にfixの張り方、ルトの見出し方等非常に良いトレーニングになったと思う。用いたルトが登山期間中に一ヶ所も崩壊しなかった事は、ルトにまさぐいのなかつた事を意味する。

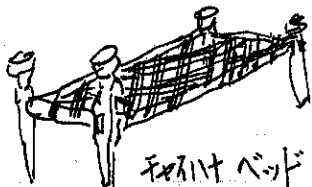
Sherni Gang氷河の動きは、あまり活発ではないがicefallの崩壊は活発で日に一度はヒルズに7が大音響とともにくさり、毎日必死のたおであった。

氷河のスケールという点でも、目測をあまりC2は一度移動させるはめになった。C2の移動による一日かかっている。

若年隊員に氷河の新ルトをトッパで考案せよと、実際にこのおれ考案して話にならないうらいであった。が、経馬のためとできるだけトッパで行かせた。まだまだ判断力に乏しい所がある。グレバスを極端にこわがり、正しいルトマインディングができないわけである。

第4 ice fallは、けっきょく一度もトッパを出さなければ行かなかった。

September 1, 1974  
at Skardu



フェイザベッド

### (3) 測量に関して

Pakistan 政府へ報告する義務のある項目として、測量により作図した Sherni Gang Gl. の地図がある。この地図は Park Hotel で2日ばかりで仕上げた。けっきょく、クリンメーターでの方位取りは参考にする程度にしかならず、平板でイリダットを使ったものが実際に役立った。おもしろくは、C2まで杖をあげて測量しておくべきであった。3点あれば、実際に正確に方位を取り、Mapping できる事も今回の測量で判明した。4.5km 程度の距離の実際の正確にできれば、あとこの基点2 Point を利用して、3点、4点と拡大していけば、正確な地図を作り得る。氷河の中では、作業が困難になるので、できたらギャラバン中から、測量しながら進むのが better である。これも小まめに、特長をつかみながら、Sketch 等も加えておけば、良い結果を得る。まず、全員が作業に従事する事もたいせつで、日ごりのシフターで良く、トレーニングされている事が必要であることは言うまでもない。

登山活動を主としながらも測量しながら登るだけの体力と気力も、日本山でただ登ってくるだけではつかない。山に入った時は、Naturalist として何かはくるぐらいの心がけを持ってはじめて、酸素の薄い高所でもそれを成し得るだけの力がつくというものである。

Sherni Gang Gl. は、全長20km 程度のあお大きくない氷河であるが、Lesser Karakorum の南面特有の岩山群と

小さな氷河の組合せで実に複雑な地形を持っていた。巨大なインセルが多くあったり、氷河が2分3つに分れて流下したり、Uターンしたり、ice fallが4段にもなっていたり、complexな点は、カラコルムの如味な Siachen Baltoro 等と比べると異質である。

測定の基準として Saltero Kangri を使用したのは言うまでもないが、Sheryi が Workman の Map では、一峰しかなく、これが W.P. を意味するのか、E.P. を意味するのか、定かではなく、各 Point を fix するのに苦労した。Damsan (1713) 6666 m あたりを使用あるいは K7 も利用し、再度 Drawing してみなければ、正確に fix されない。Park Hotel Model は、試作中の試作といった所である。

この試作地図に必要な notice を書き入れて登山本部へ送っておく。来年は、残念ながら Sheryi へ再挑戦しなければならず、マップサラサス、その他の地域は後の計画となりそうである。

September 8<sup>th</sup>, 1974  
in Park Hotel, Rawalpindi

#### (4) Fixed Rope について.

ヒマラヤの登山及びカラコルムの登山で fixed rope の使用について、注目される様になったのは、いつ頃であるかは、きりがないが、近年急峻な、リッジや壁からのルートが開拓されつつあるのは、ユマル等の登降器の発達とともに、フィックスガイルの有効な使用が目立つわけである。

誰でも経験する事であるが、fix ガイルが下降の不安を取り去り、数回の登下降をお場合、時間的にも実に早くなる事もあり、フィックスの所へくればほとほとおぼろである。

今回の Exp. でも fix の使用が実に有効に Camp の前進に役立った。total 2600 m の fix を持っていたが、2200 m を使い切ってしまった。シエルピカンリ東峰の南稜は、fix なしの登下降では荷上げもおぼろかないう急なリッジであり、又、C4 建設を断念した要因の一つに、fix rope を使いつくした事をおげられる。

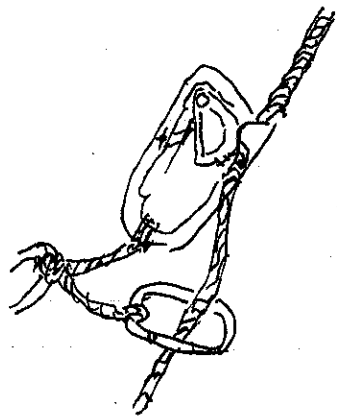
まず今回の使用の仕方について考察してみる。ロープの種類は、8 mm × 200 m のもので、赤色の登山仕様のもので 1200 m (十人用) 漁業用のもの 1400 m を持ってゆき、別に区別なく使用していった。赤色のものが 200 m で、kg. 白色が kg. と重量に差があるが、白色のものは、より甘く、キンクができる。そのくせがいつまでもとれないという欠点があった。又、ルーフも作りにくく、使にくい。白色という事で、新雪の後の、ロープ引き出しの時、捜しにくいし、紫外線にも弱いであろう。少し、軽い事と、安値であるという点は、認めら

此るので、石上げ用のコフとして、十分使用できるが、8mmにする必要はないと考えられる。

従って、登山仕様の8mmのものという事になるが、此工作に、6000m以上で、10kg近くのをボツカしければならず、かなりきつい仕事となる。できれば、ポパイロピレン等、軽い素材を実験してみる必要もあろう。

次に、登降器として、ユマールを使用。カラビナの並用綱買ブけたが、新雪後では、fix ropeに雪が付きそれがユマールの anti-slip 機構に付着し、ユマールの slip の原因となった。その他は、ユマールは使用しやすく、登行にも下降にも均その役目を果たしてくれた。この場合でも白色8mmのザイルはユマールのくい込みにより毛羽立ちやすく、B.C.上の急降ルンゼ等では、全体重をかける部分もあり、多少不安でもあった。8mmザイルにユマールは、マイガン北壁でのザイル切断事故という事もあるので、慎重を期さねばならない。特に、通常のクライミング

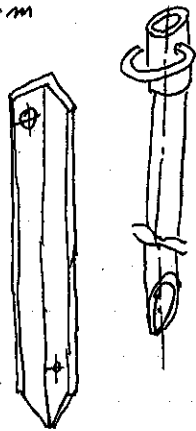
と異なり、ザイルに常時、体重を掛けるという、マイガン北壁登攀技術である事をよく認識しておかねばならない。すべてこの基本的考えに従って、計画実施したいものである。ピンの取り方、ユマールセット、カラビナセット、等に針を加え



ザイルの傷等にも要注意である。

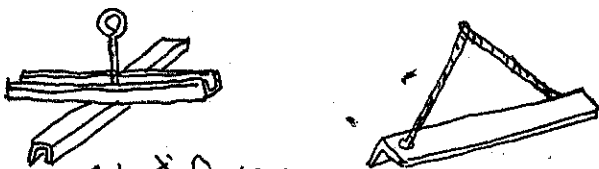
次にピンセットの方法であるが、今回使用したものは、

1. 110°式 snow bar 1m & 60cm
2. L30x30x3 snow bar 50cm
3. ice piton channel 型
4. Rock piton
5. 6mm Rope (おて縄)



等で、110°式はアルミ、L式は、LB60の硬い材質の snow bar を使用した。6000m以下の Shergu Gang 氷河では、新雪の下、old snow は、ザラメでよく踏み固めておけば、雪は十分にすり、日中の高温時でも、荷重方向を考慮して、おて縄でよく踏み固めておく事により、50cm L30のものでも十分使用できた。6000m以上では、新雪 powder snow が深く、pinを作るために、かなりのアルミピンを強いらねば、又、キキもあまり良くな、岩のない所が連続していれば、かなり不安であったと思われ、幸い、C3以上では、露岩に Rock piton を使う case に恵れ、50cm L30の snow bar も、使用場所を選べて、使いこたせた。おて縄の snow bar も、十分に雪中にうめて、日射の影響を直接受けぬ様、長いおて縄を使用した。雪面から50cmぐらいの深さをピンの頭として、上にうめ返して、よく踏み固めて使用した。

6500m以上の上部になれば、さらに雪質が乾燥し縦  
ピン式では fixされなくなる事が予想されるので  
アンカー bar 式のものの考案が必要と思われる。



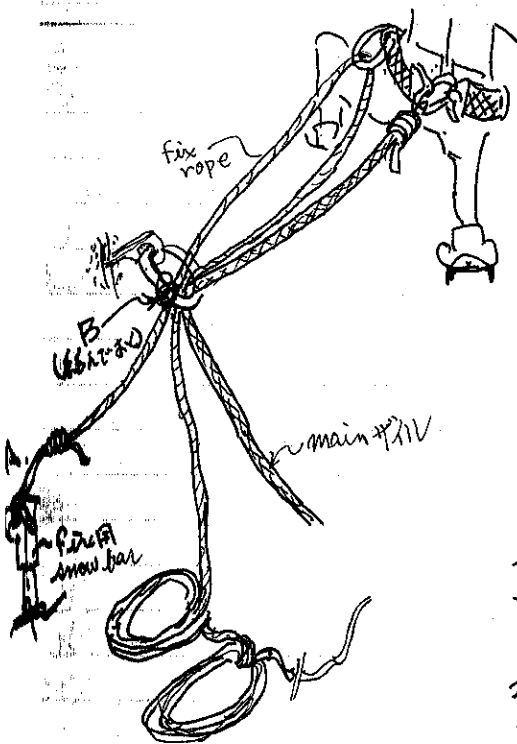
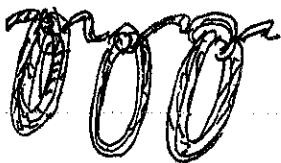
アンカー式 fixピン

上図右のタイプであれば、通常スノーバーでも使える  
所見した1課見である。

fix 工作の最大の Point は、いかに確実なピン  
を道所に作るかであるので Pin については、何種も  
考案実験の必要がありそうである。

さて、実際に、fix 工作に出掛ける場合であるが、  
登りながら fix を張る方法と、下りに張ってゆく方法  
があり、どちらをとるか、fix 工作の時間と難易  
に大きな影響をおよぼすと思う。今回、ice fall  
では、ルートを開いた帰り道に、下降しながらセッ  
トしてゆく。C3 から上部の雪壁と雪稜では、登りながら  
ザイルを固定していった。これは Case by Case であらう  
が、実に決めがたく苦勞した事の 1 つである。

ルートの出し方でもセカンドは苦勞するが、左図の様に  
20m ぐわいのループを連続に  
作っておけば、おつれな(200m  
のザイルを出す事ができる。



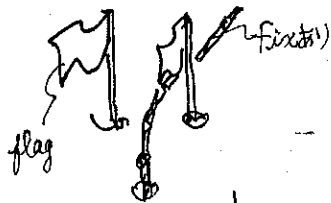
登りながら fix を固  
定する方法は左図に一  
例を示す様に登れば  
よい。A 点で下部エンドを  
固定し、ダブルザイルと  
同様にして登り、適当に  
ピンを打ってゆき、ザイルを  
通してゆけば、fix があら  
ぬ方へ流れてゆく心配も  
ない。ルートごとに fix  
を張る事ができて、必要  
長さをはきりする各点の  
カラビナの所で A 点から  
くる fix ザイルは、トップ  
がすでに固定しておいた  
方がよい。もうすれは、セカ

ンドは、AB間のロープをすでに fix rope として使用できる  
クリットがあり、時間短縮に役立つ。

ザイル操作は非常に複雑となるのでできればメインザイ  
ルは、色違いにして区別しておくべきであらう。又、fix rope の  
場合は、ピレホイントによっては、くずしてロープを流さねばならぬ  
いであらうから、セカンドは、ユマールをうまく使って、トップが、  
ザイルの重みで登りにくくなるような横にしてやらねばならぬ  
ない。これらの操作は、十分トレーニングしておくべき事  
なのである。

下りにfixを張るのはずと簡単に説明する必要もないと思う。要はどちらが安全でかつ speedy であるかの問題である。

さて Method はこうしたものであるが、何度も通るルートでは、常に各ホーンを点検してから使用する事を忘れてはならない。又、one at a time や continuous climb で通るルートと、fix rope を使用して通るルートは、基本的な性質が異なる technique であるからおのずと違ってくるものである点も注意したい。ナイフリッジの上にfixを張っても不安定さめまりない事、U字形のトレスにfixを張ったりにも引張られて危険な事等。さらに、Pierの間隙が長いと、8mmのD-70に3人も4人も入る事になる点等、注意が必要である。fixは場合によっては完全に新雪に埋められてしまう事もあるので、fixを示す pole をその近くにラフ事も必要である。



最後に、どこにfixを張るかであるが、必要最低限にfixを使うためには、むだな所は極力固定しない事である。水平部で使用する rope の長さは以外に99%のものがある事を知っておきたい。あと100mのfix不足に派しても、おとしまつりである。

September 15th, 1974  
at Asia Hotel in Lahore

### (5) Rawalpindi ⇄ Skardu 間のトランスポート

今回の Expedition では、Rawalpindi Skardu 間のトランスポートに、Indus route を利用した。